opusdei.org

聖ホセマリアの生涯 -36

内戦が始まってそろそろ二年になろうとしていました。この頃にはかつて100人はいたフェラスの学生仲間の中でも戦死者の数が12人を越えました。その中には2人のメンバーもいました。

2024/01/26

過去の記事はこちらから

4月の初めサバデルという名のホテルに引っ越した、聖ホセマリアとペ

ドロとパコとの三人の生活が始まりました。ホテルにはガラス張りの出窓があり、その部屋は休暇や仕事の用事でブルゴスを訪れた数多い友人や知り合いが神父から霊的な指導や励ましを受ける場所となりました。その中には若者だけでなく、社会的地位の高い人々も少なからず含まれていました。

神父は何としても戦場に散らばっているメンバーや友人たちとの連絡を取りたいがりました。必要とあらば、3等列車で二日もかかる南の果てまで旅をしました。自ら前線を訪れるだけでなく、以前マドリでらいで生寮で始めた通信を書いて彼らいと考えました。誰もひとにぼっちではないと感じさせかったのです。

戦場にいた若者たちはこの通信を読み、慰めや励ましを受け、返事を書きました。次の号ではその手紙が紹

介され、みんなが昔の仲間の近況を 知ることになりました。

内戦が始まってそろそろ二年になろうとしていました。この頃にはかつて100人はいたフェラスの学生仲間の中でも戦死者の数が12人を越えました。その中には2人のメンバーもいました。

6月初旬、マドリードを包囲する部 隊にいたリカルド(フェラス寮の寮 長)から「軽い傷を負った」との電 報が届きます。聖ホセマリアは、即 座に汽車に飛び乗り、不吉な考えを 打ち消しながら一日かけて現地に到 着しました。手榴弾の爆発による怪 我でした。全身傷だらけでしたが、 傷は深刻ではありませんでした。遠 くにマドリーの町が見えました。リ カルドの同僚の士官が神父を監視所 まで連れて行ってくれ、高性能の双 眼鏡を貸してくれました。それをの ぞくと懐かしい建物や道がつぶさに

見えました。目と鼻の先に自分の霊 的子供たちと家族がいるのだ。彼ら と会えない辛さで身を切られる思い でした。

7月、内戦中の最大の激戦となるエブロの戦いが始まります。その戦場にホアンがいました。神父は彼に会うため危険な最前線にまで足を運びました。次に使徒ヤコブの墓があるサンチアゴ・デ・コンポステラに巡礼しブルゴスに帰りますが、そこで不思議な事件が起こります。

尾崎明夫

pdf | から自動的に生成されるドキュメント https://opusdei.org/ja-jp/article/sei-josemaria-36/(2025/12/15)